

知求会ニュース

2019 年 12 月

第 72 号

◎ 博士後期課程 博士号取得、おめでとうございます！

趙美慧(国際学研究専攻・10 期生)さん・胡哈斯其木格(国際学研究専攻・8 期生)さんが、2019 年 9 月 30 日(月曜日)に今春授与された陳佳敏さん・長田元さん・鄭安君さんに続いて第 25 号～第 26 号の博士号学位を授与されました。なお、論文要旨などは本号の「博士録 50」と次号の「博士録 51」に掲載されますので、併せてご一読下さい。

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)(東北大学)2 名・博士(文学)(名古屋大学)/(筑波大学)/(東北大学)3 名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)1 名・博士(人文学)(パリ東大学)1 名・博士(芸術学)(筑波大学)1 名・博士(社会学)(一橋大学)1 名・博士(農学)(東京農工大学連合大学院)2 名・博士(国際学)(宇都宮大学)16 名・博士(経済学)(名古屋市立大学)1 名・博士(観光経営学)(慶熙大学校)1 名・博士(人間・環境学)(京都大学)1 名・博士(学術)(杏林大学)/(筑波大学)/(東京大学)/(一橋大学)4 名・博士(国際開発学)(名古屋大学)1 名・博士(国際関係・紛争・平和学)(キングス・カレッジ・ロンドン)1 名の計 36 名です。

◎ 宇都宮大学創立 70 周年記念セレモニー開催

令和元年 11 月 23 日(土曜日・祝日)午前 10 時から 12 時まで、峰キャンパス大学会館多目的ホールにて、「宇大のこれまでとこれから ～学生とともに行動する～」のテーマのもとに記念セレモニーが開催されました。オープニング～学長挨拶～・10 年間の振り返り・SDGs in 宇大 Part1 私たちが取り組む SDGs Part2 あなたが伝えたい SDGs フォトコンテスト表彰式および高砂淳二氏(工学部卒業生)と受賞学生とのトークセッション・ヒストリカルゾーンコンセプト発表・記念合唱などのプログラム内容でした。

◎ SDGs 推進奨励賞およびフォトコンテスト受賞おめでとうございます！

宇都宮大学 SDGs 推進奨励賞受賞者

宇都宮大学 SDGs 推進教育奨励賞 平井英明先生(農学部)・出羽尚先生(国際学部)

宇都宮大学 SDGs 推進研究奨励賞 瀧本家康先生(教育学部)・藤井広重先生(国際学部)・出口明子先生(教育学部)

宇都宮大学 SDGs 推進学生社会貢献奨励賞

金敷奈穂(農学部)/羅金山(地域創生科学研究科)/JAMAL(代表:渡辺早希・矢野いずみ)/藤井ゼミ 10 名(代表:福原玲於莉・横山友輝)/宇都宮大学環境改善学生サポーターECHO37 名(代表:堀内泰我)/こどものまち UST 5 名(代表:伊藤玲菜)/矢野いずみ(国際学部)/家畜繁殖生理学研究室 10 名(代表:横山葵)

あなたが伝えたい SDGs フォトコンテスト入賞者

学生の部	SDGs 大賞	遠藤隼『田んぼは楽しい遊び場だ！』
	SDGs グラフィック賞	栗原義一『つぶらな瞳に魅せられて』
	SDGs グラフィック賞	大和勇輝『復興への長い道程』
	SDGs メッセージ賞	矢野いずみ『レバノンの中のパレスチナ』
	SDGs メッセージ賞	井手之上健太『スラムにて』
	高砂賞	遠藤隼『毛虫もじっくり見てみよう』
職員の部	SDGs 大賞	矢吹和巳『国家百年の計』
	SDGs ピーブル賞	阪本公美子『屋根の上のごちそう』
	SDGs プラネット賞	飯郷雅之『那珂川のサケから世界を視る』

◎ 掲載記事紹介

1. UUnow 第 49 号 (令和元年 11 月 20 発行) 14-15 頁に、「研究 keyword」コーナーで「変化を肯定する文化人類学」の標題で金子亜美先生の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. UUnow 第 49 号 (令和元年 11 月 20 発行) 10-11 頁に、「創立 70 周年記念 特集 3 持続可能な世界の実現のために SDGs を考える」のコーナーで木村華さん(国際学科 2 年)の記事が掲載されました。

◎ 刊行案内

1. 田巻松雄先生が 2019 年 10 月 31 日に下野新聞社から、宇都宮大学国際学叢書第 10 巻『ある外国人の日本での 20 年—外国人児童生徒から「不法滞在者」へ』を刊行しました。<https://www.shimotsuke.co.jp/articles/-/243528>

研究室訪問 51 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

特別寄稿

「特別を普通にするために」

～多言語翻訳システムがもたらす教育のターニングポイント～

宇都宮大学国際学部客員准教授 若林 秀樹

文部科学省は、「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ等に関する調査」の結果を隔年で公表しています。そして、9 月に発表された最新の報告 (平成 30 年 5 月 1 日現在) から私が感じたのは、日本の学校現場における外国人児童生徒教育は、このままでは手遅れになるかも知れない、という危機感でした。なぜ手遅れなのか、その理由をいくつか示すと

ともに、新たな支援のあり方を提案しようと思います。

公立学校に在籍する日本語指導が必要な児童生徒数（以下、要指導児童生徒）は、外国籍 40,485 人、日本籍 10,274 人、計 50,759 人です。前回（平成 28 年 5 月 1 日現在）と比較すると、外国籍が 6,150 人、日本籍が 662 人増加しています。外国籍の増加が目立ちますが、外国籍児童生徒数そのものが、86,015 人から 93,133 人と、2 年間で 7,118 人増加していますので、要指導児童生徒 6,150 人の増加は納得できます。関係者の間では、計 5 万人を超えたことが取り沙汰されていますが、その数字だけでは本当の深刻さは見えません。

要指導児童生徒が在籍する学校数に注目することで、課題の深刻さがわかります。注目すべきは、要指導児童生徒（外国籍）が在籍する学校は 7,753 校となり、前回の 7,020 校から 733 校も増加したことです。これは、これまで外国人児童生徒教育に取り組んでいなかった、少なくとも 733 もの学校が、新たに支援に取り組まなければならないことを示しています。参考までに、日本籍の要指導児童生徒が在籍する学校数は前回の 3,611 校から 43 校の増加にとどまり、3,654 校です。

新たに支援に取り組む学校に関する報告はありませんが、直ちに専門教員を配置したり、通訳者等を見つけたりすることは難しいと思われ、果たして必要な支援が実施できているか不安です。また、要指導児童生徒のうち、日本語指導を受けている数も報告されています。外国籍で日本語指導を受けているのは 79.3%で、実に 20.7%（＝8,380 人）が日本語指導を受けていないことになり、この深刻な数字は前述の 733 校と無関係ではないと考えられます。日本語指導が実施できない理由としては、日本語指導を担当する教員がいない、指導ができる学校との連携が取れないなどの実態が報告されています。

主に南米からの日系人等が増加した 90 年代、外国人の居住は都市部や工業地帯に集中する傾向がありましたが、近年の雇用や生活の多様化に伴い、いまは全国各地に広がっています。外国人の居住が地方に分散することは“散在化”と呼ばれ、その傾向は今後ますます強まると考えられています。そしてこの“散在化”は、これまで外国人施策や日本語指導に無縁だった多くの自治体や学校に、対応の必要性をもたらしました。散在化の特徴については、イラスト資料を掲載しましたのでご覧下さい。急遽、要指導児童生徒の支援に迫られた多くの自治体や学校にとって、支援の予算や人的リソースを投入することは難しく、事態は深刻です。

散在化の実態

■日本語がわからないな外国人児童生徒**40,485人**は
全国♣**7,753**の公立学校、全自治体の**47.7%**（♠**830**自治体）に在籍しています。

（文科省調査、H30.5月調査データ）



※散在化（少数散らばり化）により、
指導教員や通訳がいない学校や自治体が多くを占めています！

注1) 図中の数字は外国籍のみに関するものであり、日本国籍**10,274人**は含みません。
 注2) 日本語指導を必要とする全児童生徒数は、40,485人 + 10,274人 = **50,759人**です。

これまでの支援体制は、要指導児童生徒が一定数以上いる場合、日本語教室を設置して専門教員を配置したり、自治体から学校に日本語指導員や母語通訳者を派遣したりするのが通常でした。しかし、図に示したように、対象在籍数が少ない自治体や学校にとって、そのような支援体制を作ることは簡単ではありません。それなら、散在化が進むこれからの教育現場においては、どうすれば地域格差の無い支援体制を作ることができるでしょう。

私は、中学校で外国人生徒支援に直接関わり、大学では子ども支援に関わる教員への情報提供や研修に取り組みました。しかし、専門的な教員や支援者に頼る従来の支援体制では、散在化や多言語化に対応することは難しいと考え、現在は多言語翻訳技術を教育に活用するための研究に注力しています。外国人児童生徒教育が手遅れにならないための1つの手段として、多言語翻訳システムの活用は大きな効果が期待できるからです。

教員の多くは、教育実践に対する高い意欲を持ち、子どもや保護者との信頼関係を築くための労を惜しみません。しかし、相手が日本語を理解できないと知ると、“通じないから無理”という意識が先に立ってしまい、教員としての本来の能力が発揮できなくなってしまう。多言語翻訳システムの教育活用は、教員が持つ“何とか支援したい”という意欲（＝人間力）を、多言語翻訳エンジン（＝IT力）が支えるという考えです。専門的な支援者に

頼るのではなく、身近な学級担任や教科担当教員などが積極的に関わる、という支援体制を実現します。

また、保護者との連携は外国人に限らず重要です。私は今、教員と保護者が言語の壁を越えてコミュニケーションができる、多言語連絡帳システムの事業化を進めています。“E-Tra ノート”というそのシステムは、3月に開催された総務省主催の多言語翻訳試作品コンテストで最優秀賞を受賞しました。教員は日本語による操作だけで多言語の保護者に連絡を送信、保護者は母語で受取り、保護者の反応は日本語で教員の手元に集約されます。配布資料やイラストも添付もでき、各保護者の理解度が一覧できるため、教員業務の軽減にもつながります。また、緊急時の多言語による伝達も、日本語のサンプル文を選択するだけで簡単に送信できます。

* E-Tra ノートの詳細は HP「E-Tra ニュース」をご参照ください。 <https://e-tra.jp/>

これまでの外国人児童生徒教育は、「特別なスキル」を身につけた「特別な教員（支援者）」による「特別な教育」という位置づけでした。教員養成課程ではあまり縁の無い、“日本語教育”の推進などを中心に掲げ、専門性の高い教員を育成しようとしたことが、皮肉にも外国人児童生徒を「特別な子ども」という枠に閉じ込めてしまった一面もあると感じています。

もちろん、日本語教育の推進や、専門性の高い教員が多く育つことは大切です。しかし同時に、学級担任を始めとする全ての教員が、日本語が理解できない子どもにも積極的に関わろうとする意識も大切であり、そこでは多言語翻訳システムのような、コミュニケーションの壁を取り除くツールが大いに役立ちます。

“通じないから無理”とあきらめていた支援が、翻訳ツールの活用で、“自分もできる”に変わったとき、外国人児童生徒教育は「特別」ではなく、誰にでもできる「普通」の教育なのだと教員は気づきます。そしてその気づきは、様々な困り感を持った、多様な子どもへの寄り添いにつながるはずです。教育現場における多言語翻訳システムの活用は、学校の「特別」を「普通」に変える、小さなターニングポイントを創出すると考えています。

参考資料

- 1) 「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成 30 年度)」の結果について
(文部科学省)

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/09/_icsFiles/afieldfile/2019/09/27/1421569_002.pdf

(2019 年 12 月 5 日原稿受理)

博士録 50 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。

「中国合弁自動車メーカーのサプライヤー・システムと組織間協業形態

—華晨 BMW、北京ベンツ、一汽 VW の事例を中心に—

趙 美慧

中国の自動車産業は飛躍的な発展を成し遂げ、2009 年以降は生産量や保有量において世界一になった。中国自動車産業の競争力は徐々に向上をしているが、その背景には、販売量の約半数を占めている合弁系自動車メーカーによる生産の現地化に伴って、技術指導や生産方式・管理方式等が導入されたことが中国自動車産業全体の発展に大きく寄与しているという現状がある。2022 年までに外資に対する出資率制限が廃止されることが決定しており、その後中国系自動車メーカーがいかに競争力を維持あるいは向上させることができるのかが懸念されている。

本論文ではグローバル化が進行している中国系自動車産業における合弁系自動車メーカーと部品サプライヤー間のサプライヤー・システムや組織間協業関係（知的資源の獲得）を中心に分析を行い、あわせて人材育成・確保（人的資源の獲得）についても分析し、それらの特徴、現状と問題点を探る。最後に今まで外資系メーカーに依存してきた合弁系自動車メーカーのうち、中国側合弁先自動車メーカーの競争力向上の視点から、今後の持続可能な発展を図るための提言を行った。

具体的には主に多元的なサプライヤー・システムを位置付けることのできる分析枠組みを用いて 3 社の関係者に対して調査票によるインタビュー調査を行った。次に、3 社の自動車メーカーとサプライヤー間の組織間協業関係を明らかにするため、組織間協業関係に関する調査を用いて 3 社の関係者に対して調査票によるインタビュー調査を行った。結果として 3 社のサプライヤー・システムは市場重視型の開発・生産段階の取引システム、協力型の問題発生時の対応システムで近年多くの自動車メーカーで観察される日米のハイブリッド型のサプライヤー・システムに分類できる。また、競争力における知的資源の獲得において重要である組織間協力関係の分析において、華晨 BMW はサプライヤーへの支援と育成を重視し、北京ベンツは今まで取引経歴のあるサプライヤーと多く取引していること、一汽 VW はサプライヤーに任せていることが多いことが明らかになった。3 社は同じくドイツ系合弁自動車メーカーであるが、組織間協業関係においては異なる仕組みを導入していることが分かった。その理由は各社の販売量、売上高、利潤率さらに中国の合弁先の企業形態と規模などに関係すると考えられる。

現状から見ると、華晨汽車は本論文で取り扱っている他の 2 社より影響力が弱く、政府からの支援も現地省政府レベルにとどまっている。それゆえ、華晨汽車は自社の競争力を

向上させる必要があり、そのためには積極的に自社製品の設計、開発、生産管理などにおける自らの知的資源の蓄積や合資メーカーの優れた人材を自社に引き寄せるなどの人的資源の蓄積が重要である。一方、北京ベンツと一汽 VW における中国側合弁先は管轄官庁が中央政府に近いことにより、一般企業に比べて一層優れた資源や国からの支援を得ることが可能である。

人材育成・確保の現状において 3 社とも大学における高等人材育成や共同研究を行っているものの受動的であることが分かった。また、中国側合弁先メーカーの管轄官庁の違いにより、人材育成プログラムへの重要度にも違いがあった。

今後の持続可能な発展を図るためには、合弁系自動車メーカーにおける中国系メーカー側も開発と生産段階から積極的に参加し、外資系メーカーとともに 優良な地場中国系サプライヤーや優れた現場の人材の育成・確保 に注力すべきである。中国系の優良地場サプライヤーの育成 や知的資源を 活用できる人材の育成・確保をすることは中国自動車産業全体の能力向上にも繋がる重要ポイントである。

私は 2010 年に宇都宮大学国際学部社会学科に入学して以来、今年は 10 年目に入りました。2010 年にはまだ 20 歳である当時の私はその後博士後期課程を修了し、学位を取るとは夢にも思いませんでした。今この十年を振り返ると沢山のいい思い出や苦労した思い出はありましたが、これらを合わせてとっても貴重な思い出であると思います。今後は今まで宇都宮大学で学んだ知識、受け継いだ信念などすべてを抱え、今後人生に生かしていきたいながらの新段階に歩み続けていきたいと思っています。

また、この場を借りて、本論文の執筆にあたり、始終暖かい激励とご指導、ご鞭撻をくださいました指導教員の磯谷玲先生に心から熱く御礼を申し上げます。先生には、学部在籍中から、9年半にわたりご指導を頂いたほか、様々な面でお世話になりました。また、有益なご意見とご協力を頂いた鎌田美千子先生、松村史紀先生、倪永茂先生、Malee Kaewmanotham先生をはじめ国際学研究科の先生方々に心より御礼申し上げます。

最後に、日本で応援し続けてくれた母親と息子沐澤、中国で励まし続けてくれた夫海洋にも感謝の気持ちを伝えたいと思います。

(国際学研究科 国際学研究専攻 第 10 期修了生)

(2019 年 10 月 24 日原稿受理)

知究人 35 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうぴと)を設けました。

「大学院にすすんで」

宇都宮大学大学院 地域創生科学研究科
社会デザイン科学専攻
コミュニティデザイン学プログラム
修士 1 年 渡邊 翼

宇都宮大学、大学院修士 1 年の渡邊翼と申します。所属は、地域創生科学研究科のコミュニティデザイン学プログラムです。

分離融合の必要性に応えるべく、2019 年から宇都宮大学には「地域創生科学研究科」が新たに創設されました。私が所属しているコミュニティデザイン学プログラムは、各自の専攻する分野の知見を活かして、次世代のまちづくりに貢献できる人材の育成を図っています。

私がこのような大学院に進もうと考えた背景には、いくつかのきっかけがありました。元々国際学部に所属していて、国際協力に関心を抱いていた私ではありますが、学部生の時に障害のある方々と接する機会が数多くありました。知的障害や、見た目には分かりにくい発達障害などのある方々と接する中で、自分自身が関わり方に悩むことがあったり、あるいは同じように悩んだりする人々を見てきました。物事の見方や考え方が大きく異なる人同士が同じ空間で生活していると、衝突が起こり、お互いにストレスを感じてしまうというのは、よくある事です。

しかし、そういった場面でお互いに我慢しながら関わり合うのではなく、何か上手に付き合い、共に生きていける方法はないのか模索したいという想いが芽生え、気づけば大学院へ進む動機になっていました。

そして現在私は、保育園における「気になる子」との関わり合いをテーマに、修士論文を進めています。簡単に言うと障害やその疑いがあったり、保育士が関わり方に悩んだりするような「気になる子」と大人の関係性をどう育てるかという研究です。この研究を進めていくうちに、私自身の考え方は大きく変化してきました。

これまでは、多動や衝動性、対人関係の不器用さゆえに、保育の文脈から逸脱する「気になる子」をどう変化させていくかという視点で考えていました。しかしそれは時として、保育の文脈に当てはめるために、子どもをコントロールしようとする姿勢になりかねません。「こういう風に育てなければならない」という思い込みや、発達への過度な期待が、ある意味大人を縛り付け、無意識に子どもをコントロールしようとしてしまいます。すると、子どもの想いが込められた言動が大人の期待に沿わなかったとき、いとも簡単に切り

捨てられてしまうことに私は気が付いたのです。相手の想いを大切にし、共に生き合っていくために何が必要とされているのか、これから明らかにしていこうと思います。

大学院は、自分がこれまでの人生で出会った大きな問いと闘っていく、最高の舞台であると私は確信しています。そして、問いと向き合う自分自身の在り方までもが問われる事を実感しました。そこで得られるものは、問いへの答えだけではなく、これから自分がどのように生きていくかという姿勢そのものであり、今後の人生に大いに意義をなすものであると信じています。

(国際学部 国際社会学科 第20期卒業生)

(2019年12月09日原稿受理)

海外だより 30 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「アフリカの奇跡ボツワナから」

在ボツワナ日本国大使館 二等書記官 **菅野 直和** (かんのただかず)

私は現在、南部アフリカのボツワナという国に住んでいます。日本の1.5倍の国土に、人口が200万強という非常に人口密度の低い国です。ボツワナは、ダイヤモンドの発見により急速に発展を遂げ、皆さんがイメージする「貧困」のアフリカとはひと味違い、高中所得国に分類されています。首都ハボローネでは、高級車が多く走っており、大きなショッピングモールが複数存在します。週末には、家族連れがショッピングモールのレストランに行き、最新の映画をきれいな映画館で楽しみ、新作のナイキのスニーカーを履きこなしています。また、「紛争」というイメージのあるアフリカですが、ボツワナは1966年の独立以来一度も紛争を経験していません。治安も安定しており、人も穏やかで、皆さんがボツワナを訪れば、にこにこしながら迎えてくれるはずです。

一方で、皆さんがイメージするアフリカの特徴を大いに備えているのもボツワナの特徴の一つです。なんと言ってもゾウの生息数が世界一と言われており、ボツワナの北部に車を走らせると道路脇にたくさん野生のゾウがいるのに驚かせられます。もちろん、ゾウが道路を横断することもあり、その時はゾウが過ぎ去るのを我々人間はじっと待つほかありません。また、夜間の運転はゾウにぶつかる可能性があるので非常に危険です。また、北部の街カサネに遊びに行った際には、なんとハイエナが街中を疾走していました！イボイノシシは街の至る所におり、早朝窓の外を見たらゾウが大打進していました。カサネ以外にも、オカバンゴデルタ、あまり知られていませんが世界一大きい塩湖マカディカディパン、またボツワナ中央のカラハリ砂漠には、カラハリライオンも生息しており、見所満載の国です。

現在、なぜ私がボツワナにいるかと言いますと、在ボツワナ日本国大使館に勤務しているためです。所謂、外交官という職業です。以前にも知求会に投稿させていただいたことがあったのですが、その時はキングス・カレッジ・ロンドンで博士号を取得した報告の寄稿でした。その後運良く、外務省の経験者採用試験に合格し外務省に入省することができました。博士号を取得したこともあり、大学で教鞭をとることも夢見ていましたが、外交官になることも一つの夢で、実は宇都宮大学国際学部在学中、外務省専門職試験問題集や外交官の職務に関する本を買っており、その夢を実現させることができました。ボツワナは自分にとっては2か所目の赴任地で、最初は同じアフリカのウガンダで勤務しました。そこでの経験が自分にとって非常に有意義なものであったため、再びアフリカで勤務がしたいと思いボツワナには自ら希望し来ることができました。

現在の仕事ですが、大使館で政務と広報・文化という二つを主に担当しています。政務では、ボツワナの内政・外政等の重要な事案についてメディアの情報をまとめて本省に報告したり、国際場裏で重要な事案がある際にはボツワナ政府に日本の立ち位置を伝えたり、日本への支援を要請・交渉したりするのも自分の仕事の一つです。広報・文化は、ボツワナの人々に如何に日本のことを知ってもらうかを念頭に置き、ボツワナの大規模イベントで日本大使館ブースを出展して日本の文化を伝えたり、フェイスブックページで日本の広報をしたりしています。また、大使公邸の料理人にお願ひし、ボツワナのソールフードである牛肉料理「セスワ」を巻き寿司にしてもらい、それを当館の行事で振る舞い、日本とボツワナの友好の象徴として打ち出しています。

この仕事で重要なのが、やはり英語力です。自分も人に自慢するほどの英語力ではありませんが、ロンドンの博士課程時代に鍛えられた文章読解力とプレゼン技術はこの仕事をする上で大変役に立っています。もし国際学部の在校生でも卒業生でも（私のように経験者採用試験という道があります）、外交官を目指したいという人がいれば、英語に限らず、フランス語でも中国語でも良いですが、語学力を磨くことが大変重要です。この紙面上では外交官の仕事についても、ボツワナの良さについても書ききることが不可能です。もし、在校生の皆さんがアフリカの現状を知りたい、外交官の仕事を知りたい、あるいは海外留学について知りたいという要望がありましたら、いつか宇都宮大学に呼んでいただき、講演する機会をいただければと思います。その日を心待ちにしています！

（国際学部 国際社会学科 第7期卒業生）

（2019年12月13日原稿受理）

海外留学今昔 29 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「アメリカと日本の違い ～留学経験より～」

土田 美幸

私は2018年の8月から2019年の5月までアメリカ合衆国のインディアナ州北部にあるTrine 大学に留学をしていました。さらなる英語の上達のために英語を第一言語とする国で暮らしてみたいと思ったのが留学のきっかけでした。現地には2学期間滞在し、1学期目では留学生向けの英語のプログラム(ESL)で学び、2学期目では通常の学部の授業を履修しました。今回はその体験をもとに発見した日本とアメリカの違いを紹介したいと思います。

最も印象深かったのは、日本とアメリカの大学の教育システムの違いでした。日本では大学受験という大きな壁を乗り越えた者が華やかな大学生活を送るというイメージが強いかと思います。それに対してアメリカでは、大概是高校でC以上の成績があれば、簡単な面接と書類審査で大学生になれます(もちろんトップレベルの大学はそうはいきませんが)。しかし、大学生になれたからと言って、日本ほど余裕のある大学生活は送れませんでした。例えば、日本では各授業週に1度、90分であるのに対し、アメリカでは基本的に月水金と火木の時間割が一緒に各授業2日に一度受けます。そして大概の授業では毎回課題が課されました。つまり、日本では課題をやる余裕が1週間あるのに対し、アメリカではたった2日しかないのです。私は当時、毎日のように24時間空いている図書館で夜中まで課題をやっていました。現地の生徒たちがただでさえ大変と感じているのに、私はそれ以前に英語を理解するのに時間も必要でとても苦勞した記憶があります。

生活面での日本とアメリカの違いもいろいろありました。その一つの例としては、学生としての服装です。留学当初、私は日本の大学で着ていくような服をアメリカでも着用して登校をしていました。でも、毎回のように友達や売店の人たちに、「今日どこか行くの?」と聞かれていました。自分ではそこまで着飾ったつもりはありませんでしたが、現地の人たちからすれば学生にしては着飾った感じがしていたようです。確かに、周りをよく見れば、ジーンズにTシャツ姿の学生がほとんどで、そのうえ化粧している人はほとんどいませんでした。学食に行けば、学校のイベントで配られていた同じTシャツを着ている人が5人ぐらい見かける日だってざらにありました。日本でも見た目を重視しないような学生生活を送れたらもっと楽だったのに...とたびたび感じていました。また、アメリカの大学生は基本的に寮生活を送ることも日本との大きな違いでした。基本的に4人か6人部屋で、一人になることがほとんどなく、常に人とかかわっている状態でしたので、ホームシックになることはほとんどありませんでした。寮ごとでのイベントが豊富だったり、ビリヤードや卓球台、みんなで集まれる場所があつて、寮全体の人と友達になれることもできます。私は2人部屋で中国人のルームメイトとずっと生活をし、今では彼女は私にとってのかけがえのない友達です。

アメリカでの留学生活は英語力を伸ばしただけでなく、勉強面以外での経験から自分自身の視野を広げることもできました。大学に入学したころは卒業を伸ばしてまで留学をす

るつもりは全くありませんでした。しかし、人生においてとても貴重な体験をできた今では 2 年前に勇気を出して交換留学の申請を出した自分を褒め称えたいです。そして私を送り出してくれた家族や友達、手厚いサポートをしてくださった大学関係者の方々、そして現地で私を支えてくれた人たちにとても感謝をしています。これからもこの経験を活かし、これからの目標を実現していきたいです。

(国際学部 国際文化学科 第 4 年次在校生)

(2019 年 10 月 30 日原稿受理)

「韓国留学体験記」

小林 安美香

私は 2018 年 9 月から 2019 年 7 月まで韓国の祥明大学に留学していました。大学入学前から留学したいと考えており、第二外国語として朝鮮語を学び始めたことをきっかけに韓国に 2 年の夏から留学しようと決心していました。2 年の夏から留学に行くためには 1 年の 10 月頃に申し込みをしなければならないのですが、私はその時に申し込みをしそこない運よく出た留学 2 次募集に申し込み留学が決まりました。申し込んだ時、4 年で大学を卒業したいという思いから留学期間を半年にしました。しかし宇大に留学に来ていた韓国人留学生から半年は短すぎる、留学するなら 1 年行く方がいいというアドバイスをもらい、たくさん悩み結局 1 年間行くことに決めました。

このように行動や決断が遅いせいでドタバタしたまま留学に行きました。祥明大学は山の上にあり、私が住んでいた寮も山の上にありました。最初はこんな山の中で暮らすのかと心配だったのですが、ソウル駅から山の上の大学までのバスが通っているうえに山に登る坂には飲食店がたくさん並んでいました。そのため山登りや山下りをしなくても十分に生活できるし、出かける際も交通機関がとても整備されていて交通費も日本よりかなり安いので不便を感じることはありませんでした。

また、宇大と違うところとして祥明大学だけでなく韓国の大学には校舎内にカフェがあります。そのため大学生活の中にカフェがとても深く入り込んでいてカフェで勉強するのは普通のことで、オシャレなプラスチックカップを持って授業に来る人もたくさんいました。学校の図書館は 24 時間開いていてテスト期間は席がなくなるほど多くの人が利用し、テスト期間でなくても徹夜で勉強する人をよく見かけました。韓国の学歴社会を実感した瞬間でした。そして、校内全域 Wi-Fi が完備されていて授業中はタブレットやパソコンでメモを取る人がほとんどでした。授業も教授の作ったパワーポイントで行われ、レジュメは配られず各自が持参したタブレットやパソコンから学校のサイトに載せられた授業内容のパワーポイントを開いて授業を聞いていました。授業の課題としてレポートは出されませんが、ほとんどの授業がパワーポイントを使った発表がありました。個人で発表をすることもあればグループで発表をすることもありました。宇大の授業の中で発表をほぼしたことのない私は最初はパワーポイントを作ることさえ大変でしたが、原稿を韓国語で書く

のが一番大変でした。発表もとてつもなく緊張しました。

韓国留学を通して言語力向上だけではなく韓国文化の理解はもちろん、日本より進んだ韓国の通信社会に驚きました。日本ではできない体験をすることができた今回の留学経験をこれからの人生に生かしていきたいです。

(国際学部 国際学科 第3年次在校生)

(2019年12月4日原稿受理)

学生サロン 18 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「IHL ロールプレイ大会とオランダ合宿に参加して」

中野 零士

藤井ゼミ（国際法）に所属している国際学部国際社会学科4年の中野零士です。私は今年の9月8日に東京大学駒場キャンパスで行われた ICRC（赤十字国際委員会）主催の IHL（国際人道法）ロールプレイ大会に同じく藤井ゼミの学生5人と共に参加してきました。また、9月20日から27日にかけて藤井ゼミで行われたオランダ合宿にも参加しました。

IHL ロールプレイ大会

ICRC（赤十字国際委員会）とは1863年にスイス人のアンリ・デュナン（1828-1910）によって設立された国際機関です。紛争や自然災害、あらゆる暴力の犠牲になっている人々に対し、公平、中立、独立の立場から人道支援を届ける活動をしています。現在15000人以上の職員が80か国以上で展開しています。

国際人道法とは、戦争時に全ての紛争当事者が守らなければならないルールのことです。紛争が発生した場合の捕虜の扱いや民間人を保護すること、紛争時にはいけない戦い方、禁止されている武器などを定めています。ハーグ条約やジュネーブ条約といえ皆さんも一度は耳にしたことがあると思います。そして、この国際人道法を用いて実際の ICRC 要員のように武装勢力との交渉や避難民への人道支援といった様々な場面での対応を競うのが今回のロールプレイ大会です。

大会は3人1組のチームに分かれて行われます。病院への道を占拠している武装勢力の兵士と交渉して病院に通してもらう、避難民からどんな支援が必要かというニーズを聞き取る、軍事作戦を計画している将校に対し国際法に則った内容にするよう説得するといった場面を経験しました。会話は全て英語で、語学力だけでなく3人のチームワークも重要です。

私は今回ロールプレイを体験して、人を説得するということはとても難しいと感じました。我々がいくら赤十字はジュネーブ条約で認められた組織だと言っても現場の指揮官はこちらを敵だと思い警戒します。捕虜の虐待は国際法違反だと言っても仲間を傷つけられ

た兵士達は復讐しようとしします。このような場合、事前に覚えた知識も重要ですがそれ以前に参加者の人間力が問われているなど痛感しました。相手の立場に立って共感を示しつつこちらの目的、理念を理解してもらうということは今回の大会だけでなく社会に出てからも重要な技術です。私は4年生で来年は出場できませんが、今回の経験を社会人生活の中で生かしていきたいと思います。

オランダ合宿

ゼミとしてオランダへ合宿したのは風車やミッフィー、チューリップなどが有名なように、オランダが観光地として素晴らしい場所であるからというわけではありません。国際司法裁判所（ICJ）、国際刑事裁判（ICC）をはじめ様々な国際機関の所在地であること、「国際法の父」として有名なフーゴー・グローティウス（1583-1645）の出身地であるなど、国際法を学ぶ者にとっての聖地だからです。

私達はICCで実際に行われている裁判を傍聴することが出来ました。また、ICCにおいて日本人で唯一判事を務めておられる赤根智子判事との面会や、在オランダ日本大使館への訪問を通じて、ゼミ生それぞれが将来のキャリア設計を考えるうえでとても有意義な経験を行うことが出来たと思います。

最後に、このゼミ合宿を引率・指導してくださった藤井先生、日程や宿の準備をしてくださった実行委員のメンバーに感謝の意を表して結びとしたいと思います。ありがとうございました。

（国際学部 国際社会学科 第4年次在校生）

（2019年12月5日原稿受理）

キャリア指南13 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2019年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。（原稿集めに苦勞しています。）

「地域デザインセンターでの近況報告」

坂本 文子

国際学部国際社会学科4期生（‘98入学）および国際学研究科博士後期課程1期生（’07入学）の坂本文子です。NGOベトナムの「子どもの家」を支える会日本語教師・ベトナム事務所スタッフおよび宇都宮市市政研究センター研究員を経て、現在宇都宮大学地域創生推進機構地域デザインセンター（Center for Regional Design、通称CRD）の研究員として、宇都宮大学陽東キャンパスで勤務しております。宇都宮大学とこれほど長いお付き

合いになるとは予想しておりませんでした。現在は宇都宮大学の運営に携わるなかで、恩師たちとお仕事をする機会もあり、また違った側面から母校と関わっているところです。

今日は、「地域デザインセンター」および宇都宮大学地域デザイン科学部共通専門科目「地域プロジェクト演習」についてご紹介しながら、私の近況をご報告できればと思います。

地域デザイン科学部は、2016年に宇都宮大学に5つ目の学部として開設されました。コミュニティデザイン学科、建築都市デザイン学科、社会基盤デザイン学科の3学科から構成された文理融合を謳う学部です。3学科混成で実施される共通専門科目も開講され、即戦力となるまちづくりの担い手を育成しようというのが狙いです。

なかでも3年次の学生を対象とする「地域プロジェクト演習」では、3学科混成で5〜6人のグループとなり、約1年間、最大30のテーマ（フィールド）で、パートナーと呼ばれる地域の方々と共にさまざまな地域の課題と向き合い、解決策提案を目指して活動します。学部学生約150名、学部教員約40名、パートナー等地域の方約100名、総勢300名近い人が関わる演習です。文系理系の垣根を越えて学ぶ学生たちが、それぞれの観点をぶつけ合いながら、創造的な思考をとるようになっていく過程を見ていると、日本の大学教育が新たなステージに入ったと感じます。

地域デザインセンターは、2016年度に地域デザイン科学部の附属機関として設置され、この「地域プロジェクト演習」のプログラム開発・運営を担ってきました。2018年度からは全学組織となり、同演習をはじめとする教育支援だけでなく、地域デザインに関する共同研究や各種プロジェクトのコーディネートなどを行っています。

私はこれらの立ち上げに携わり、4年目となります。社会問題を都市や室内環境などの空間で捉える建築的な視点、そして道路や河川など街の構造から捉える社会基盤的な視点は、国際学部を卒業し、特に社会学を基礎とする私にとって、とても新鮮な毎日です。現在は、回答のない多種多様なコーディネートの仕事と並行して、文理融合を自らも実践すべく、防災マネジメントをご専門とする社会基盤デザイン学科の先生と共に、外国人住民をふまえた地域の災害時対応について調査研究も進めています。

地域デザインセンターでは、地域（自治体、NPO等団体、企業など）からの相談業務も行っておりますので、地域デザインに関わる大学との連携でお手伝いできることがありましたら、お声かけください。

（国際学研究科 国際社会研究専攻 第4期修了生）

（2019年11月26日原稿受理）

特別寄稿

「第5回宇都宮大学ホームカミングデー 国際学部企画イベントに参加して」

倉重 祐子

はじめに、宇都宮大学創立70周年、そして国際学部におかれましては25周年おめでとうございます。今回、私は卒業後はじめて宇都宮を訪れました。駅前が随分変わっていたのには15年という時の経過を感じ、また、大学に近づくにつれ見覚えのある景色が現れ無事到着した時には安堵感を覚えました。それはまるで高校の時にオープンキャンパスに訪れた時のような感覚でした。国際学部のイベント会場に到着すると、当時私達が座っていた席には教壇に立たれていた懐かしい教授らが着席されており少し不思議な感覚でしたが、教授や十数年ぶりに会う友達との再会は思っていた以上に嬉しくて、話していくうちにだんだん当時の思い出も蘇り、一瞬学生時代に戻ったような楽しい時間でした。

卒業時、平成16年の国立大学法人化が大きな転換期であったにも関わらず、卒業後の宇都宮大学についてあまり知らなかったことはお恥ずかしいことではございますが、今回、宇都宮大学の歴史にも触れて振り返りができてよかったです。学長のご挨拶に始まり、学部長や教授らが国際学部の現状を語ってくださったのですが、とても興味深いお話ばかりでした。特に、私の在学時には国際学部は社会学科と文化学科にわかれていたのですが、2017年に統合され、国際学科1学科となっていたことには驚きました。21世紀を迎えようとしていた頃、「国際化」という言葉をよく耳にしていた、海外に目が向くようになった私はいくつか興味のある国があり、当時は珍しかった国立大学の「国際学部」があった宇都宮大学を選びました。特に外国の文化に興味があり、文化や文学、言語・コミュニケーションなどを多く履修していましたが、社会に出てみて、経済学や統計学、国際協力などもう少し社会の部分も学習しておきたかったと思うようになりました。今は情報化の進展に伴い、「国際化」から「グローバル化」へと社会も変化し、企業の海外進出も加速し、グローバル化に対応すべく人財育成も行われるようになりました。国家間の関係だけにとどまらず、今や世界規模・地球規模で捉えていかなければならなくなり、内から外だけでなくもっと多面的に捉える視点が必要となっています。ですから、新設国際学科で社会と文化の融合した教育を受けられるのはとても素晴らしいことだと感じました。他にも私も参加していた研修レベルのものが「外国語臨地演習」科目となっていたり、新しいプログラムやプロジェクトが立ち上がっていたり、歴史とともに着々と発展を遂げていると感じました。

座談会では同窓生の当時の学生時代の様子やその後のキャリア、現状についてのお話がありました。国際学部創設当時の話や卒業後の自分の知らない頃の大学の話を聞いて、世代別に見る宇都宮大学もまた新鮮かつ歴史を感じられて楽しかったです。同じ学部生でもそれぞれ興味が違い、幅広い選択肢があり、色んな過ごし方ができたことは面白かったなと思います。色んな方の思いで国際学部ができたことも、またその後も歴史が続いて今に至っているということもしみじみと感じ、これからの国際学部に期待し応援続けたいと同時に、自分自身もまた背筋が伸びる思いでした。私は国際学部で学んだことをベースに社会にでて身に着けたスキルや積み上げた経験が相まってその後の人生に活かされていくと思っています。中でも「柔軟性」については今の自分を支えている要素だと考えていて、

それもまた大学で養われたスキルの一つだと感謝しています。紆余曲折の人生の中、プラスの経験を少しずつ積んでいくことで、将来の仕事にもつながると実感しました。目まぐるしく変化していく社会で、しなやかに柔軟に対応していけるよう私自身も頑張っていきたいと改めて感じました。

教授と在学生による国際学部の研究教育活動についてのお話もありました。「多文化共生」や「SDGs」といったキーワードについても触れられたのですが、多様な人材が集まる宇都宮大学の国際学部で過ごす4年間ですでに多文化共生を学ぶ小さな場だと感じました。新たな出会いや挑戦は、新しい発見や広い視野につながります。多様な価値観やルーツを持つ教授や学友らの生き方に触れ、また、様々な学修や経験を通じて気づきが生まれ、自己を見つめ、考えをさらに深めていける、そんな環境が国際学部には整っていると思います。キャンパスライフを楽しみながら、自分の興味のあることに存分にチャレンジし、国際学部でのその時しかできない経験を通して、みなさんの未来への可能性がさらに広がっていくことを願っています。ホームカミングデーに参加させていただき、ありがとうございました。

(国際学部 国際文化学科 第6期卒業生)

(2019年12月2日原稿受理)

東南アジア支部だより

第63号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん(国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期期生)が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019年4月から、年4回から年2回発行(4月1日、9月1日)の変更になりました。

EU支部だより

第38号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の32号の内容は、1 EU支部だより ーイタリアのクリスマス料理ーです。

さて、知求会ニュースも、無事18年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、本当にありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は 国際学部同窓会 HP (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 chikyukai@freeml.com
